

論文の内容の要旨

氏名：尾 形 大

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題目：伊藤整における「心理小説」の形成とその転回に関する研究

——第一詩集『雪明りの路』から『得能五郎の生活と意見』（1926—1941）を中心に——

本研究は、第一詩集『雪明りの路』（1926）から戦時下の長編小説『得能五郎の生活と意見』（1941）までの伊藤整（1905—1969）の文学活動を中心に、「心理小説」という概念を形成し自らの文学的認識として獲得した伊藤が、それをテコに独自の文学を構築していく経緯を考察し、その転回の実態に関して論究したものである。

『最新 文学批評用語辞典』（1998）によると「心理小説」とは、「外面的な行動よりは、認識、感情、精神的成長などキャラクターの内面的な世界に焦点をあてた小説」と定義されている。しかし、ここからは「心理小説」というジャンルの曖昧さばかりが浮かび上がってくる。こうした曖昧な概念規定は、たとえば坪内逍遙『小説神髓』（1885—86）の「小説の主脳は人情なり」、「心の中の内幕をば洩す所なく描きだして周密精到、人情を灼然として見えしむるを我が小説家の務めとはするなり」といった発言と結び付くことで、「心理小説」というジャンルの実像を見えにくいものにしてきたと考えられる。

「心理小説」とは、フロイトの学説を踏まえた無意識を含む構造的¹心理を「解剖」的に「分析」した小説を指す。その意味で、「心理小説」と一九三〇年代以前の「キャラクターの内面的な世界に焦点をあてた小説」とは質的に異なるものであり、後者は言わば〈心情小説〉として区分されるべき小説の傾向とすることができる。「心理小説」というジャンルが形成されたのは、フロイトの受容やプルースト、ジョイス、ジッドら西洋の新文学が紹介・翻訳された一九三〇年前後のことである。この当時、「新しい心理小説」を求める若い文学者たちの声に呼応して、構造的な心理の実態を微細に描き出す新心理主義という知的な〈モード〉を打ち出し、これを本格的に模索・探究したのが伊藤整であった。新心理主義に関する従来の研究では、フロイトを下敷きにジョイス文学の文体上の摂取を試みた文学実践という面に集中してきた。しかし、「新しい心理小説」は必然的に相対化すべき「伝統的な心理小説」の概念を引き寄せるものだったために、伊藤や瀬沼茂樹らを中心に一九三〇年代の時点から日本における「心理小説」史が遡られ、その〈系譜〉が作り上げられてきたと考えられる。その過程で心理を構造的にとらえる認識を獲得した伊藤は、それをテコに独自の文学を打ち立てていく。本研究は伊藤整における「心理」との出会いから模索・探究、そして転回に至るまでの「現場」を明らかにするものである。以下、各章の具体的な内容を記す。

序章「日本近代文学における「心理小説」の系譜と錯視性——伊藤整と一九三〇年代——」では、現在も広く共有されている「心理小説」史の枠組を整理・確認した上で、「心理小説」と「心情小説」とを本質的に異なる文学ジャンルと見なす視座を提出した。こうした観点から従来の「心理小説」史の錯視性を浮かび上がらせ、それが形成された一九三〇年前後の文学場を伊藤の発言を中心に整理・検証した。新心理主義というモードが新旧の「心理小説」というジャンルを区分・形成していく過程を概括し、「心理小説」（史）を構築する上で伊藤が果たした役割を明らかにした。

第一章「伊藤整文学における「詩とのわかれ」の考察——「現実」をめぐる葛藤——」では、「心理」と出会う以前の伊藤の詩作に注目した。一九二七・二八年に発表された詩群から一九二九年六月の「詩とのわかれ」までの詩の変化を分析した結果、実生活上の問題に敏感に反応する「私」の心情が『雪明りの路』の「背景」である「故郷」に投影される構造が明らかになった。その上で、「故郷」の変化として表現される伊藤の抒情詩の方法を、プロレタリア的「現実」に引き寄せられていく過程とともに考察した。

第二章「詩から小説へ——文学的転換の内実——」では、自詩を「抽象的悲鳴」と評した詩論「ルナ」（1928・11-12）を詩作上の転機ととらえ、そこで提起された「現実」の内実についてモダニズム的傾向という観点から論じた。とくに萩原朔太郎『詩論と感想』（1928）の影響に着目し、同書を通して詩と散文の接近・融合という発想を得た伊藤の詩のスタイル上の変化と、『雪明りの路』以来の詩の世界の変質・解体の試みを、「猿」「南京の感情」「支那蕎麦」の三詩の分析を通して考察した。

第三章「「新しい心理小説」をめぐるプルースト文学受容の実態——短編小説「アカシアの匂に就て」に

おける心理描写の方法——」では、構造的心理の描出を自らの創作領域・対象に設定した伊藤が、その認識の上にプルースト文学の影響を撰取した経緯を分析した。最初に伊藤のプルースト受容の特異性を明らかにし、それが海外のリトル・マガジンに掲載された英訳“The Death of Albertine”を通してなされた可能性を指摘した。このことを踏まえて、「アカシアの匂に就て」（1930・8）の分析を通して「私」が自らの心理の「内部」に沈滞し、他者の心理を連想風に創作する有り様を描出する点に、伊藤文学における「プルーストの影響」を見出した。

第四章「翻訳家・伊藤整と一九三〇年代——第一書房版『ユリシイズ』翻訳を軸として——」では、James Joyce, *Ulysses*. (1922) の受容に着目し、伊藤の翻訳論および日本語改革案の内実を考察した。当時の翻訳論争の中に伊藤の翻訳論「翻訳の研究」（1933・11）を位置付けると、「原文への忠実性」を重視する独自の翻訳規範が浮かび上がってくる。そうした翻訳規範が、翻訳者に原文の構成法を活かした翻訳を迫った *Ulysses* の翻訳・共訳の現場を通して形成されたことを検証し、日本語での心理描写という点において語彙・語法の面で次第に行き詰まりを覚えていく経緯を明らかにした。

第五章「新心理主義から幻想的「心理小説」への展開——「生物祭」成立の背景——」では、新心理主義をめぐる応用と多様な模索の実態、脱出までの歩みを追った。意識の流れの適用という「制約」に自らを縛りつけていた一九三一年前半の伊藤は、小林秀雄らの批判を通じて「新しい心理小説」の応用、修正の方向性を探りはじめる。その成果のひとつが自身を投影した主人公の心理を「内部」から幻想的に描出した「生物祭」（1932・1）であった。「生物祭」成立の背景にジョイス『若い芸術家の肖像』（1916）の影響を見つつ、この時伊藤が模索した新たなリアリズムの方向を浮かび上がらせた。

第六章「伊藤整と「〈文章論〉の時代」——心理描写のための文章をめぐる——」では、「新しい心理小説」の実現に不可欠とされた心理を連続的かつ緻密に描写する（新しい文章論）をめぐる文学動向に注目し、その中に伊藤の文章論を位置付けた。それは極力説明しないことを理想とする谷崎潤一郎の文章論とは異なり、自身の心理をリアリズムの筆で饒舌に、同時に幻想的に描出し得る文章として模索されたことを明らかにした。

第七章「「幽鬼の街」における構造的心理への眼差し——新心理主義からの脱出と私小説的方法への転回——」では、「私」の構造的心理を「内部」から幻想的に描き出した「幽鬼の街」（1937・8）の意義を考察した。私小説的枠組と幻想という二つの要素を融合させた「幽鬼の街」での試みは、結果的に作者の分身たる主人公と語り手（現実の作者）との間の〈ズレ〉を生じさせるものであった。私小説的枠組において、主人公と語り手の間のズレとは本来バグ以外の何ものでもない。しかし、「幽鬼の街」以降の伊藤文学がこのズレを意識的に用いて自らに批評的な眼差しを向けていく事実を踏まえて、「幽鬼の街」を新心理主義からの脱出、独自の文学への第一歩として意味付けた。

第八章「書き下ろし長編小説『青春』における心理の描かれ方——新心理主義と『得能五郎の生活と意見』の狭間で——」では、はじめての書き下ろし長編小説『青春』（1938）で他者の心理を「外部」から「観察」して描出する方法が実践されている点に注目した。『青春』における他者に向けた批評的な眼差しの内実、芸術至上主義的思考と失墜、そして長編小説の試みを『得能五郎の生活と意見』（1941）での文学上の転回を準備した重要なスプリング・ボードとして位置付けた。

第九章「『得能五郎の生活と意見』における「余談」的方法の内実——自己批評的「風刺」の構造と自己戯画化の獲得——」では、「余談」と呼ばれる要素をあえて小説の中心に据える方法に注目した。この方法をゴーゴリおよび中野重治の系譜としてとらえ、その影響の検証を通じて『生活と意見』の「風刺」、「笑い」の内実を分析した。その上で、主人公・得能五郎が他者に向ける批評的な眼差しが、語りの水準を跳び越えて作中に登場して得能の自意識を「内部」から批評的にとらえる「筆者」の風刺的な眼差しを呼び込み、さらに私小説的枠組の応用によって得能五郎・筆者・伊藤整を覆い、三者を貫く自己批評性が生じている事実を指摘し、これを伊藤文学の転回の内実として提出した。「余談」的方法を通じて自分自身と自身が属する文壇の枠組を戯画的に批評する文学スタイルが獲得され、戦後の伊藤文学の本質的なテーマとして深化・追求されていくことが明らかになった。

終章「自己戯画化と自己批評の文学史——伊藤整文学の射程——」では、自らを戯画的に描くことで自分と自分に関係する既存の枠組を批評的に見、風刺する伊藤文学のスタイルが構築される経緯を概括した。その上で、「心理小説」という概念構築を通じて生まれ、はじめて形成され得たこの新しい文学スタイルが、後の後藤明生や筒井康隆らの文学にもたらした影響を指摘し、伊藤整文学研究の今日的意義を提示し今後の展望とした。